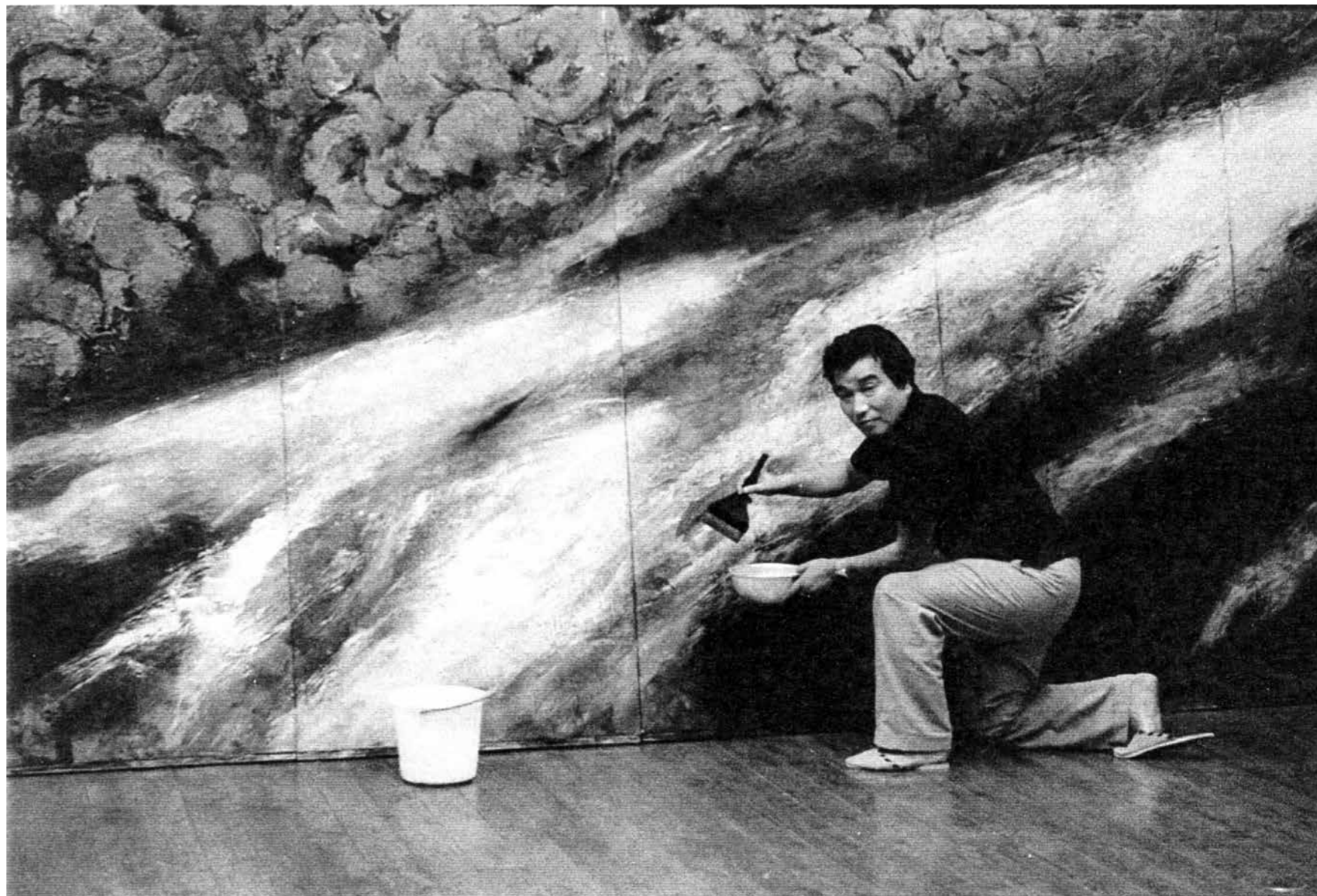


# よこやまみさお 横山操 生誕100年 燕市吉田が生んだ 炎の画家の足跡を辿る

戦後を代表する日本画家の一人で、燕市名誉市民でもある横山操さん。彼が旧吉田町に生まれてから今年で100年を迎えます。従来の優雅で奥ゆかしい日本画に真っ向から対立し、黒く荒々しい筆致で人々の生活や工業風景、山の噴火や塔の火災など、時事性の高い一瞬の景色を描いた操さん。これまでなかったジャーナリズム的な視点を取り入れ、戦後の日本画に革命を起こしました。12月4日(金)から燕市産業史料館で開催される企画展にあわせ、今号では、そんな日本画壇の風雲児、横山操さんをご紹介します。



## 熱情と奮激の画家 横山操

大正9年に旧吉田町に生まれた横山操さん。尋常高等小学校卒業後、画家を志し、14歳で上京します。昭和14年に川端画学校に入学し日本画を学ぶと、翌年、第12回青龍展で初入選。そこで人生の師となる川端龍子と出会います。しかし、その後戦争に召集され、さらに終戦後は捕虜としてシベリアに抑留、石炭採掘に従事します。従軍に5年、抑留に5年。20歳からの多感な時期を、戦争の中で過ごしました。

そんな操さんが本格的に画家として歩み始めたのは復員後、30歳になってからです。青龍社に復帰し、画家とネオンデザイナーとして制作に励みます。

「熱情と奮激、これが俺の人生だ」自分の写っている写真の裏に書きつけたその言葉の通り、戦争で抑圧されたエネルギーを解放するかのようになんげに意欲作を発表。操さんの初期の絵は大型の作品が多く、黒く真っ直ぐな縦横の線、少ない色、トリミングしたような構図が特徴で、そのテーマも、現実的で大衆に親近感を抱かせるものばかり

でした。この新しいスタイルは当時の日本画壇に衝撃を与えます。

昭和37年に青龍社を脱退した後は無所属で活動。多摩美術大学で後進の実技指導にもあたるほか、この頃より水墨画を描き始めます。

精力的な制作を続けていた操さんでしたが、51歳の時に脳卒中で倒れ、右半身不随に。しかし、必死のリハビリの末、左手で制作を再開し、精神性の深い新しい境地の作品を生み出します。その後、再び脳卒中を起こし、53歳でその生涯を閉じるまで、操さんは折れることなく絵を描き続けました。

大正9年	旧西蒲原郡吉田町に生まれる。
昭和2年	吉田町立尋常小学校入学。
昭和9年	吉田町立尋常高等小学校卒業後、画家を目指して上京。洋画家の石川雅山のもとで一壺堂図案社の版画やポスター描きを手伝う。
昭和13年	第25回光風会展で《街裏》が初入選。
昭和14年	川端画学校日本画部(夜間部)に入学。第2回新興美術院展で《隅田河岸》が初入選。
昭和15年	第12回青龍展に《渡船場》が初入選。12月に徴兵され、中国大陸を転戦する。
昭和20年	終戦と同時にシベリア(カザフ共和国、現カザフスタン)カラガンダの23区第9収容所に抑留、石炭採掘に従事。
昭和25年	吉田町に帰郷、その後再び上京し、一壺堂図案社、不二ネオン会社でデザインの仕事を。9月、青龍社復帰。
昭和26年	結婚。
昭和28年	春の青龍展で《白壁の家》が春展賞受賞。ここから青龍社最高位の社人となるまで6年間で11回連続で受賞する。このほか、晩年まで各公募展に意欲的に出品する。
昭和31年	初個展を銀座松坂屋で開催。第28回青龍展で《炎炎桜島》が青龍賞受賞。
昭和37年	青龍社脱退。
昭和38年	東京画廊で「越後風景展」を開催。
昭和41年	多摩美術大学日本画科の教授に就任。川端龍子逝去。
昭和46年	脳卒中で倒れ、右半身不随に。その後左手で制作に取り組む。
昭和48年	制作途中に倒れ、逝去。享年53歳。
平成12年	吉田町名誉市民となる。
平成18年	燕市名誉市民となる(合併による)。

### ●青龍社

日本画団体。昭和3年に日本美術院を脱退した川端龍子を主宰者として発足。大きな空間にも耐える強い絵画を目指した(会場芸術)。春秋2回の展覧会を開き、戦時体制下でも活動を続けたが、昭和41年、龍子の逝去とともに解散。その間、帝展(新文展一日展)、院展と肩を並べる日本画壇の一大勢力に成長した。



▶青龍社新年会にて。後列左が操さん、前列中央が龍子。

《十勝岳》制作風景。飛行機で取材を行い、幅6.3メートルの大作をわずか2カ月で描きあげました。▶